の東北に在る山。高さ三五七米。地質第三紀層。

タカツキカンベエ　高槻勘兵衛　祿千石。萬治二年勘兵衛の御使役を除き、足輕二十人を預けられたが、勘兵衛は御使番に役料があり、足輕頭にはそれがないから、不平の爲に職を辭し、京都に至つて浪人となり、名を道也と改めた。

タカツジチョウ　高辻帳　→ゴウソンタカツジチョウ　鄕村高辻帳。

タカツジツグナガ　高辻繼長　菅原氏。父は長廣。文章博士、左大辨、少納言、權大納言、正二位。後花園・後土御門二天皇の侍讀であつた。文明七年七月三日加賀に於いて六十二歳を以て薨じた。

タカツブリヤマ　高つぶり山　江沼郡極樂寺領に在つて、土人高つんぶりといふ。地圖に八幡山といふもの是である。高さ七六米に過ぎぬが、附近では最も高い。

タカツブリヤマ　高つぶり山　羽咋郡福浦の東方に在る山。高さ一四二米。地質輝石安山岩。

タカツメジンジヤ　高爪神社　羽咋郡大福寺の高爪山巓に在る。高爪明神とも六社宮ともいひ、別當に眞言宗大福寺があつた。式內等舊社記に、『鷹爪山神社。富來鄕內大福寺村地內鎭座。稱ニ六所明神一。別當所金陵山大福寺。』と見えるが、金陵山は金龍山の誤であらう。又能登名跡志には、『本社は六社權現也。高爪・氣多・三崎・石動・白山・八幡宮の六社也。』と記する。今高爪神社と稱せられる。社藏に、承元三年二月造像銘・國永七年八月候繕銘を有する木造藥師如來座像壹軀体高八四糎、平安朝末期と認められる木造天部像壹軀体高四八糎がある。又建治元年九月造五作願主傳燈大法師祐禪の六所明神懸佛は檜板造彩畫のもので、徑二四糎を有し、表面に八幡大菩薩・白山妙理權現・伊須流岐權理・氣多大明神・若王子・高爪大明神の本地佛を一面一体宛描き、重要美術品に指定せられてゐる。→ダイフクジ　大福寺。

タカツメヤマ　高爪山　羽咋・鳳至二郡の境に在つて、海拔三三八米。地質輝石安山岩。大福寺山・金龍山ともいひ、山姿圓錐狀を爲すを以て能登富士・能登の笠山とも稱せられ、又洞ヶ岳といふこともある。寶曆の調書に、『頂上に觀音堂有之。毎年六月十八日祭禮有之。十七日夜龍燈上り候由申傳候。麓より頂上まで道程廿三町程。』とある。

タカツメヤマカンノンドウ　高爪山觀音堂　羽咋郡高爪山の頂にあつた。能登誌に、『絕頂に當國廿六番の札所觀音堂あり。脇に藥師石躰の大佛あり。是は荒木の海より上り給ふ大佛にて、重き事限りなきに、其比六十歳餘に成る里人に告有て背負山上せしと也。』と記する。

タカデカンノン　高出觀音　羽咋郡杉野屋に在る。邑傳に菅公の神靈を京都から勸請した時共に奉戴した觀音であるといひ、菅原の菅原神社毎三十三年の大祭には必ずこの觀音を迎へて開帳するを古例とし、その授受の儀は菅原・杉野屋の境なる天王松に於いて行はれた。天王松は路傍に在る大樹であつたが、嘉永の頃に枯死した。

タカドウ　高堂（タカンド）　能美郡板津鄕に屬する部落。鄕村名義抄に、この村に古へ甚敬寺があつたとし、百合若大臣が鷹供養の爲に堂を建てたとの傳說を附會してゐる。しかし能美郡名蹟誌に、地藏堂があつたといふから、村名はそれから起つたのであらう。

タカドウシン　高堂新（タカンドシン）　能美郡板津鄕に屬する部落。

タカトモザツチョ　鷹友雜著　二册。乾卷は神武紀遡流考・續日本紀考證・記傳改說等十一編、坤卷は陰陽名義・宇氣比の考・麻疹考等八編を載せる。又別に同題の一卷があつて、志賀の山越・をさのかはひ・華夷十辯評・忌辛辨義を集めてある。

タカトリミヨウジン　高鳥明神　鳳至郡に在つた。文政の社號帳に、谷屋村（今柿生）の產神を高取大明神といひ、饒速日命を祭神とすることを記すが、今その社がない。

タガナホカタ　多賀直方　通稱逸角・新左衛門・信濃。豫一右衛門直定の子。寬文六年前田綱紀の奧小將となり、新知三百石を受け、漸く加增して四千石に至り、貞享三年父の祿二千石を襲いで六千石となり、若年寄に任ぜられたが、元祿十年七月九日蟄居を命ぜられた。その罪狀は不明である。後三十年を經、吉德の時享保十四年十二月に至りて宥され、十六年十月致仕し、七百石を養老封として春宵と號し、十八年八十三歳を以て歿した。直方は字を敬甫といひ、材幹あつて事務に熟じ、典制に通じ、その筆記に平尾邸拜領一件・松雲公近習向留帳拔萃がある。

タガナホキヨ　多賀直淸　通稱左近、後豫一右衛門。寬政二年十二月十一日亡父豫一右衛門直房の跡目を相續して五千石を受け、三年十月定火消となり、享和三年十月當分御宮火消に轉じ、文化元年五月復定火消に任ぜられ、文政四年三月十五日六十二歳を以て歿し、嗣子刑部直昌嗣いだ。直淸好んで和歌を作つた。

タガナホキヨカシユウ　多賀直淸歌集　多賀豫一右衛門直淸の歌集で、その子直昌の作も少しは混ずる。詠歌上の心得一二が書かれ、直淸の隨筆も附載されてゐる。

タガナホサダ　多賀直定　幼名八十郎、後左近・豫一右衛門。左兵衛秀識の嫡男。父の歿後寬永八年前田利常に仕へて世祿千石を受け、割場奉行・屋敷奉行・大橫目に累遷し、正保元年外祖奧村易英卒後の祿千石を割いて賜はり、併せて二千石となり、人持組に列した。前田綱紀の時延寶八年公事場奉行に進み、貞享三年老を以て罷め、寶永五年歿。年九十六。法號唯一空心居士。直定淸廉恪勤、在職數十年、治体に諳練し、政事に貢獻すること多かつた。又禪學を好み、大乘寺月舟及び卍山に參した。

タガナホタケ　多賀直威　通稱縫殿・新左衛門。字は兌濟。直方の嫡男。尪弱を以て仕へず、文學を好み、詩賦を能くし、草隸に巧であつた。享保二十年歿、歳五十七。

タガナホヒデ　多賀直秀　初諱直方。小字孫太郎、後隼人。直定の嫡男。寬文三年前田綱紀に仕へて奧小將となり、新知七百石を受けたが、十二年五月廿六日同輩關屋雲八郎と城中に鬪うて創を受け、九月七日能登鵜浦に謫せられ、居ること數年にして召還せられたが、固辭して配所に歿した。時に享保十年、年七十九。直秀學を好み、詩歌に長じた。

タガナホフサ　多賀直房　通稱新六郎。直